



ご ぼ う や ま み な み

御坊山南遺跡群

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (058) 383-1123



C区の空中写真

1. 発掘調査の経緯

御坊山南遺跡群は、住居跡、古墳、窯跡等が複合した遺跡群です。各務東町1丁目の御坊山（標高263.7m）の山裾から南へ張り出した丘陵部、斜面に位置します。この土地で、サバ土採取工事が行われることになったため、緊急発掘調査を行いました。発掘調査は、昭和63年度から平成2年度までの3ヶ年（A・B・C区）にまたがり、総面積4,320㎡という大規模な事業となりました。

土地の起伏が激しかったこともあり、高い部分は削れ、低い部分には土砂が厚く堆積するという状況のなか、発掘調査には大変な苦勞が伴いました。



御坊山南遺跡群の位置 S=1/5,000

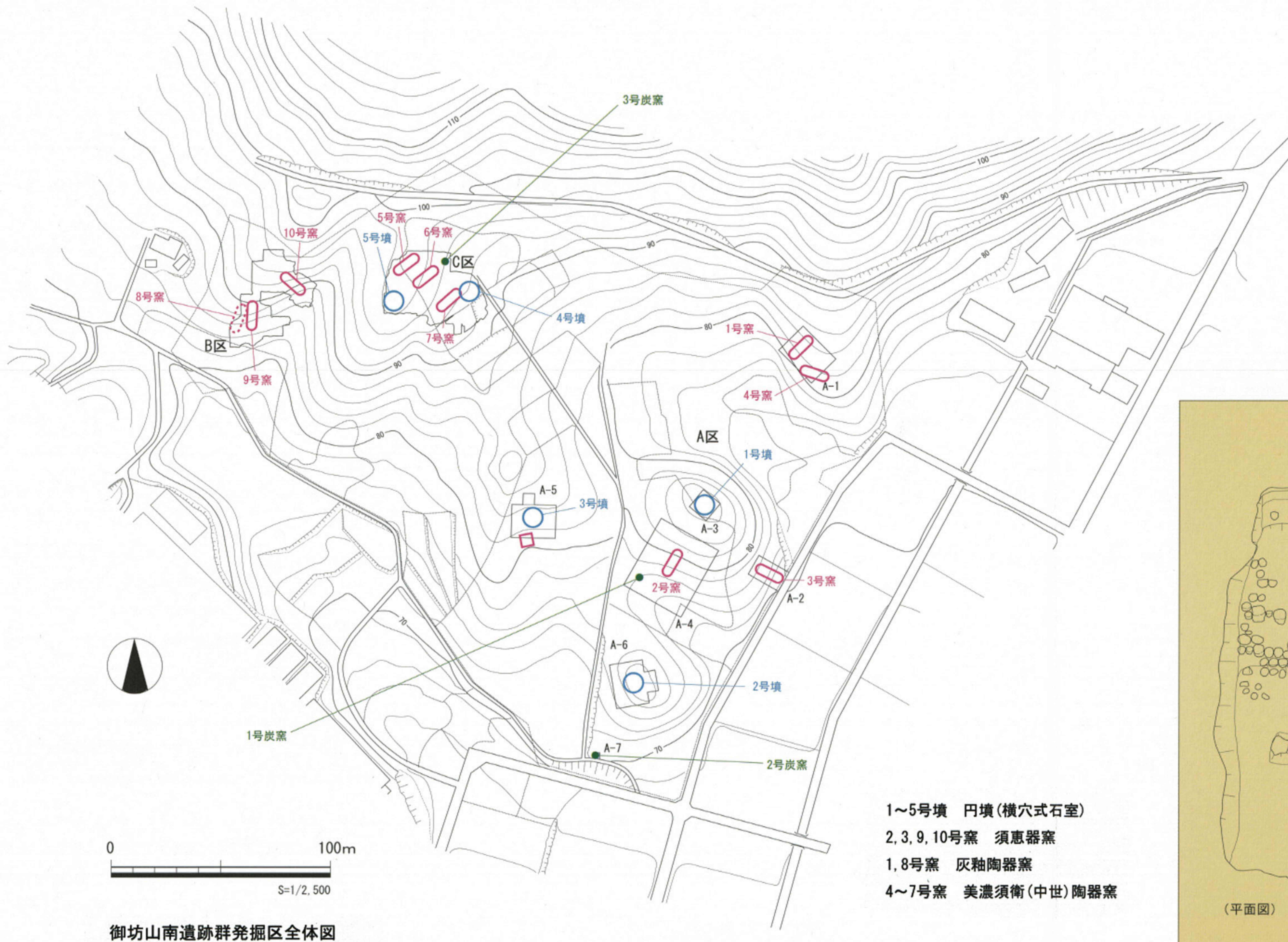
発掘調査は、事前に全域を分布調査し、その結果に基づいてA～C区に絞り込んで進めました。全体で検出された遺構は、古墳時代初頭の^{たて}竪穴住居跡1基、円墳5基、須恵器窯4基、^{かいがら}灰釉陶器窯2基、中世陶器窯4基、炭窯3基のほか、^{とこう}土坑等があります。これらの遺構は、各務原市北部を中心に広がる美濃須衛窯において、その歴史の始まりと終わりを研究するための重要な資料となるもので、非常に注目されます。

2. 発掘調査の成果 (須恵器と中世陶器の生産)

古墳群の石室内には他地域の須恵器も副葬されますが、6世紀後葉からは当地、美濃須恵産の須恵器が用いられていました。ちょうど、この頃に須恵器生産が開始されるものと考えられます。御坊山南遺跡群の須恵器窯は7世紀後葉以降のもので、須恵器生産が急激に高まる段階に属します。2・9・10号窯で焼成された須恵器は、古墳時代の伝統的器種に加え、刷新された新しい器種が勢揃いしています。後者は奈良時代以降に一般的になる須恵器であり、政治的に見れば律令体制の成立とともに美濃須恵窯も変化し繁栄していくと考えることができます。また、10号窯では鴟尾瓦を焼成していることから、7世紀後半に蘇原地域などに建立された古代寺院との係わり合いを知ることができ、このことも繁栄の理由の一つだと思われます。

中世になると、焼成される器種も大きく変わり中世陶器と呼ばれる焼き物が生産されます。同時に、窯の構造にも変化が見られ、窯毎に焼成する製品の分担を行っていたことがわかります。4～7号窯は、出土した中世陶器の型式から12世紀前半～後半段階に操業されたと考えられます。これ以降、美濃須恵では陶器の生産はほとんど見られなくなります。

これらの遺構は、美濃須恵窯における窯業技術の導入と変遷、盛衰の歴史を研究するための重要な資料となります。



御坊山南遺跡群発掘区全体図



2号窯 直径約11mの円墳で、残存長10.5mの横穴式石室が検出されました。石室内には、板状の石材を組み合わせた箱式石棺が安置されていました。



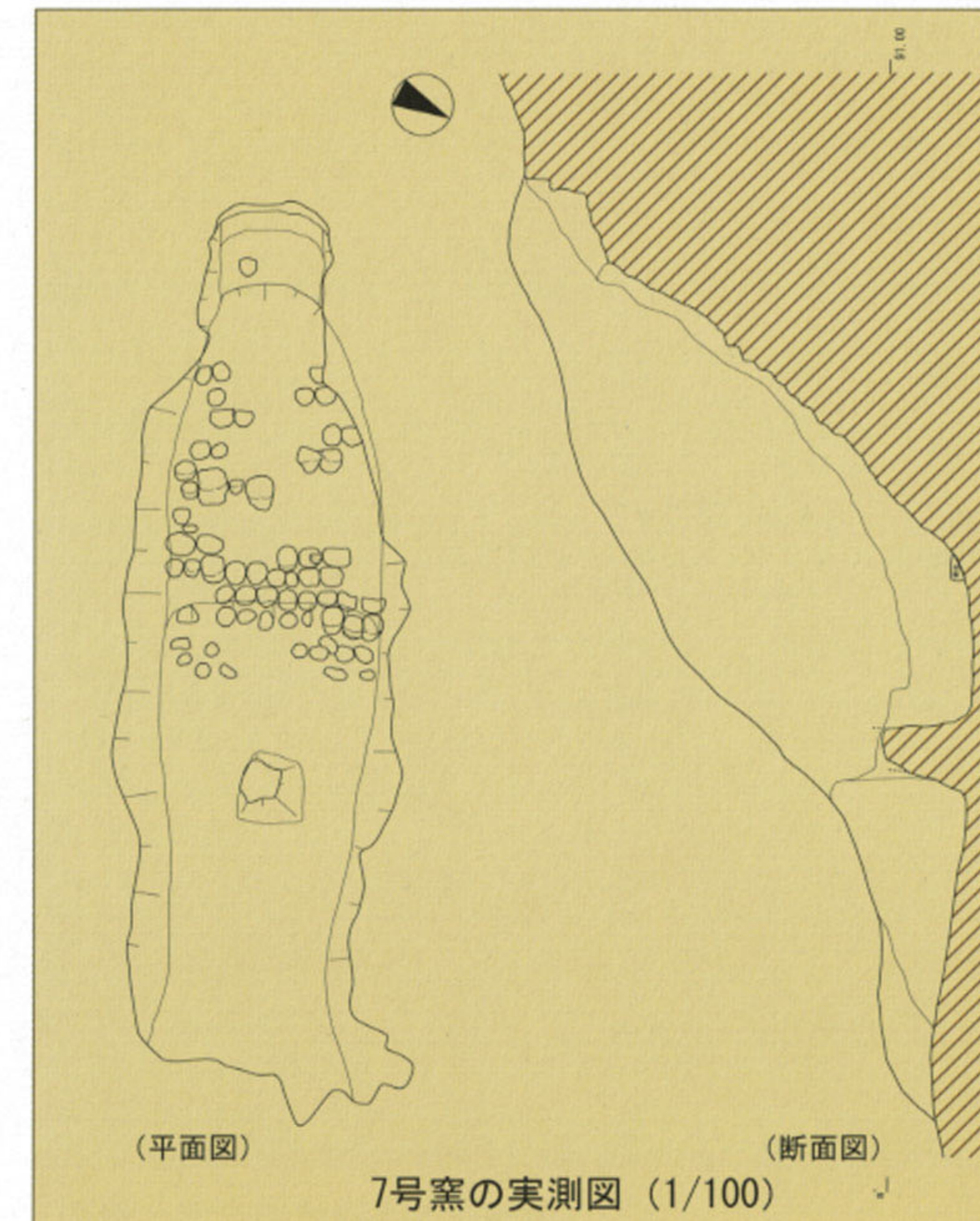
4号窯 直径約9mの円墳です。谷底に埋没しており、古墳の立地としては珍しい例です。全長6.2mの横穴式石室が検出されました。



鴟尾瓦の破片 10号窯の灰原から出土しました。鴟尾瓦とは、寺の金堂等の大棟両端に乗せられる瓦です。



10号窯 本来は須恵器専用窯でしたが、最終段階で鴟尾瓦用に窯体が改造された特殊な事例です。大型瓦の焼成のため、底面は大きく2段になっています。



7号窯 中世の美濃須恵陶器を焼成した窯の形状がよく分かる例です。窯体は深く、底面も45～50度という急勾配の構造です(左図)。この部分は階段状に削られており、焼台が並べられていました。小碗、小皿を中心に焼成されたようです。中央には分焰柱が設けられています。



須恵器 古墳時代の伝統を継ぐ器種と奈良時代以降に一般的となる新器種の両者が見られ、窯の操業が一定期間を連続していたことが分かります。須恵器の器面は無釉で、還元焼成のため灰黄褐色を呈しています。須恵器のほかに瓦も焼成しており、周辺地域の古代寺院に供給されていたと思われます。(10号窯出土遺物)

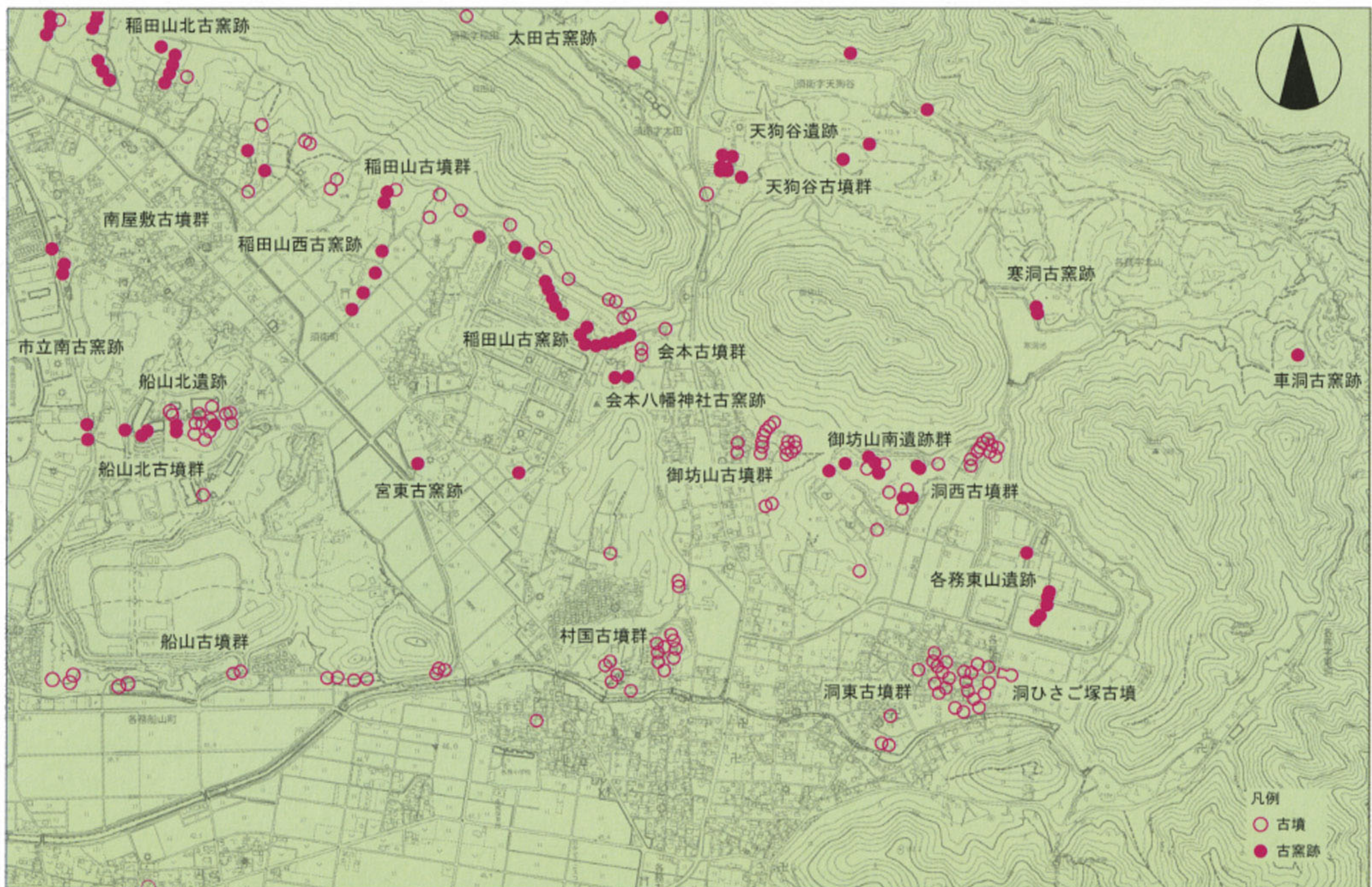


美濃須恵陶器 須恵器生産が終わると、釉薬を施した灰釉陶器の生産に移行しますが、中世には写真のような陶器を焼成するようになります。当遺跡からは、12世紀代に焼成された美濃須恵陶器が豊富に出土しました。碗・皿や大型の鉢などが見られます。施釉のため、器面は赤褐色や黄白色を呈していることが多いです。(7号窯出土遺物)

3. 周辺の古墳群と窯跡

各務原市域を中心に分布する美濃須恵窯跡群は、東海地方を代表する一大窯業地でした。この遺跡のように古墳群と古窯跡群の分布が重複する現象は、特に須恵地区において顕著に見られます。窯の操業が始まった当初は、古墳を造ることのできる集団が須恵器作りに携わり、須恵器を作った集団が古墳を造ったと考えられます。

これらのうち、天狗谷遺跡と船山北古墳群については発掘調査の後、保存整備がなされ公開されています。



須恵・各務地域の古墳と窯跡